

## はじめに(序文)

第二次大戦後、上サロベツ地域では大きな変化が始まろうとしていました。戦後開拓を背景に昭和24年よりサロベツ原野開発を陳情し続け、ようやく昭和36年から泥炭地での農業開発や各種の開発事業に向けて、自然環境や地域の社会経済などを含む10年間にわたる総合調査が始められました。当時、サロベツの開発のあり方をめぐって熱い論議が交わされました。その一方で、サロベツ湿原は観光の目玉としても注目されはじめました。

昭和40年の国定公園指定の際、サロベツの湿原域は開発の対象と目されたこともあり、公園区域とはなりません。湿原植物の盗掘の頻発などから、次第に湿原保護の機運が高まっていきます。昭和49年に利尻礼文サロベツ国立公園に指定され、ようやく湿原域の保全に目が向けられるようになりました。湿原の乾燥化が危惧され、保全対策のための検討も長期にわたり続けられてきました。上サロベツに残された湿原は、自然の営みを知ると共に、湿原とそれをとりまく人為的な環境との関係を学ぶための生きた教室となり、私たちにとってかけがえのない存在となっています。いまもサロベツ湿原は変化と新しい発見に満ちています。一方、この地域は日本でも指折りの酪農地域としての地位を築き上げました。その牧草地帯がとりまくサロベツ湿原は、低地における日本最大の高層湿原として国内外にその名が知られるようになりました。優れた自然景観の備わった学術的価値の高い湿原と、自然の恵みのなかで営まれる農業が共生する地域として、その将来が期待されています。

この地は、豊かな自然のもとで、私たちが生活する場所です。この大地が、豊かな自然を育てこそ、私たちの地域での暮らしが成り立っています。またそうであるとともに、私たちの暮らしがあるからこそ、この豊かな自然を後世まで持続することができるのです。「人は自然がなければ生きていけない、自然だけでは暮らしていけない。」このことを心に刻み、上サロベツの自然再生に取り組んでいきたいと思います。

平成18年2月2日  
上サロベツ自然再生協議会